「特集・造園家(ランドスケープ・アーキテクト)に期待する」

グランドデザインをするのは誰?

宮 脇 檀*

Who is the Designer of Grand Scape

Mayumi MIYAWAKI

まだ学校を出たばかりのころ、アメリカから帰ってきた友人に、『昔のプロジェクトの報告書や計画者グループのリストのトップは必ず建築家で、それからアーバンデザイナーやアナリスト、そして最後にランドスケープデザイナーという順序で表記されるのが普通だったけれど、今たいていの表記ではトップがランドスケープ・デザイナーで建築家の名前なんて最後の方よ』と聞かされ建築家が一番偉いと信じていた、若かった私は無然とした記憶がある。

私が学生のころだから、建築家がまずトータルに全体を考える、それを都市計画家や造園の連中が補佐するもの・・・という、古いツリー状の構成が当然とされていた時代であった。そして同時にその頃といえば、建築デザイナーというのは計画者が機能のプログラミングをし、構造家が具体的なディメンションを与え、そしてそれに意匠としての何らかのデザインをつけ加えるのが建築家である、という信じられないような認識がまだ正々堂々と通用していた時代でもあった(それは大昔のことだと思っていたら、何とついでこの間、構造家さんから、構造の設計料は躯体コストの%でいただく、建築家は意匠にかかった工費に%をかけて設計料をもらえばいいという発言を聞いて、まだ意匠などというそんな古色蒼然たる考えが根強いのかとびっくりしてしまった。そうだとすることになると、内外コンクリート打ち放しだけの安藤忠雄氏は、設計料もらえないことになってしまうではありませんか)。

同じように、今日といえどもランドスケープというのは植栽のことで、ランドスケープデザイナーとは庭を造るという意味での造園家、もっと悪く言えば庭師の上等な存在と思われることがまだまだ多いのも事実なのは、皆さんが一番御存じだろう。

実を言うと、私自身だって住宅を中心とする小さな仕事をしている時には、ほとんど庭師、植木屋さんに「ここは葉が細かく、少しの微風でもかすかにそよいでいる常緑樹で、目通り2メートルくらいの2、3本まとめて

・・・」とか、「この広がりやグランドカバーだけど3種混合なんているのではなくて何かもう少し密度の高い立ち上がったのが欲しいんですが等・・・」私のイメージを助けてもらう程度の依頼しかしていなかった。

それがこのところ、住宅地の環境設計から始まって、大きな地域の全体構成プロデュースという仕事が多くなってきた。例えば人工の島ひとつにどういう種類の建築を建てるか、それをどういう論理で全体をまとめるか、道路のヒエラルキーは、景観は、植栽は、公共施設の配置は、その内容はなすすべてを論じなければならず、当然関係官庁から始まって、デベロッパー、建築家、建設者、造成業者、造成設計者、ランドスケープ・デザイナー、サインデザイナー、ストリートファニチャー・デザイナー、照明デザイナーetcと無数の人との会議を延々と続けなければならないことになる。

もう少し簡単な住宅地の設計だと、まず都市計画課、開発課等の許認可の各官庁、道路や公園、緑地課等の引き取り側の各課、公的融資担当の金融公庫等、デベロッパー、事業者、販売主体、造成設計事務所、工事業業者、住宅メーカー、住宅設計者、同営業マン、ランドスケープ・デザイナー、造園業者、電力会社、ガス会社等々。

それぞれの立場のそれぞれの人が、それぞれの利権と権利、義務を背中にしょって出席してくる会議だから、調整がむづかしいのは重々承知、慣れてもいるからいざれどうにか収斂して見せると、それは時間と話の積み上げの問題だとわかっているのだが、困ったのはグランドデザインという全体の基幹の部分を誰が担当し決定するかが、ほとんどの場合決まっていないこと。

もちろん、いくらで仕込んで、何をどれくらいいくらかで売れば採算点か、市場の動静からいってこんなような商品をと決めるのは事業主のすること(最もバブルの最中にはそれすらやらないプロジェクトがいくつもありましたが)。

そういう経営上の問題ではなくて、地域の計画なのだから当然地域全体に対する計画、デザイン上の決定が

*建築家 日本大学生産工学部

されなくてはならない筈。

その地域を広域からどう位置づけるか辺りは、かなり行政的、都市計画的な話だが、それを受けて具体的に形かしていくことに関しては、官庁や銀行家に手腕があるわけではなく、これは私たち計画者、デザイナーの仕事。

計画の概要を受けて、それが具体的に図として降ろされてくる時点でまず計画者が必要な筈なのに、古い建築設計の話と同じで現行法規、指導要綱、基準、慣習等から、専門家と称する集団がまず絵を描いてしまう。彼らが、ヨーロッパ的な概念で言うシビルアーキテクトなら良いのだが、日本では効率を中心とした種々の権利関係の調整者でしかないことが多い。

最近多く手がけている住宅地と言うと、ほとんどが丘陵地を造成しての工事になる。もちろん環境アセスメントから生態系のチェックも必要である。それらの多くは最近、開発上の問題として義務付けられているが、その地区を全体の中でどうデザインすべきかという、どこにもチェックされない。ということは誰も考えず、開発指導要項、宅造法、道路交通法、道路構造令、電力会社配線規定、都市計画法等バラバラに存在する規定をまとめる手続上の専門家にゆだねられてしまうのである。

例えば大規模な造成となれば、当然周辺地域からの景観を考えねばならない筈なのだが、それは一部の市町村を除いて誰も考える役がない。赤むけ裸地が緑の山に代わって都市の正面に現出すると、海岸線沿いの丘陵地に突然超高層のマンションが立ち並ぶとか、そこに至る道は既存の道路との連結を考えるのは当然だが、どういう方向と上り方でこの地区に近づくべきか等の重要な問題も誰が考えることなのか不明で放りっぱなし。

造成上地表水の処理に必要な最小限の勾配で盛土、切土が計画されるのが普通なのだが、丘陵地のなかに突然平坦地ができてしまう不自然さも、考える当事者がいないし、ソシオメトリックな調査をしてみれば、道は住民にとって最も大事な地域内生活空間なのに、それは車の空間であると法で規定されているから、自動車が走りやすい用に、造成上、計画上一番作りやすい様にしか作られない。人が歩く道、子供たちが遊び母親たちが井戸端会議をするための道は、この地区だったらどう作られるべきかというランドデザインを考える人もいないのである。

そして、なお悪いことにそれぞれの職域の人が、それぞれの立場の範囲の中でしか考えていないくせにランドデザインについて口を出そうとするのだ。

造成屋さんは造成しやすい、宅造法という立場でしか造成を考えたくないくせに、それが環境を良くするといっではばからないし、警察は3叉路は交通事故が起りやすいからやめるべきだと、地区の道全体の構成を考えもしないで全てを規制しようとする。建築家もかなり悪く

で、例えば全体にランドデザインを思考する景観コードなどがあっても、自分の創作のオリジナリティを言い立てて守ろうとしない。たとえそれが、修練不足の若者の思いつきであっても。

こういう部分こそ、アメリカ的な意味でのランドスケープ・デザイナーが登場してくるものだと、現代建築家風に思考してきた私などは、いくつものプロジェクトでランドデザインに近いことをランドスケープ・デザイナーの、それともかなりの方をお願いしてみたのだが、大学の研究室系の方は別として、デザイナーとして知られる方は誰もランドデザインなどして頂けなかったという記憶が強い。

まず第一に、景観の専門学者風の人とは別として、基本的に日本のランドスケープ・デザイナーは、植栽の専門家のレベルにとどまっている人が大部分である様に見えた。どこに何を植えるかについてはかなり細やかにイメージを描いて頂けるが、それが全体からどう論理的に決められたかの説得性が乏しく、こうしたらおもしろいと思うんですとか、イギリス庭園風で良いとか一個人的な発想だけでものを言いたがる。都市計画系のコンサルタントが、いつも世界のどこかの事例をゼロックスして、貼り合わせてきて、こんなイメージでまとめたらと思うんですが・・・というのと同じ。

たぶん、日本の社会がランドスケープ・デザイナーに植栽の専門家以上の要求をしていないという現実が、そんな府にしか考えられない立場にデザイナーたちを追いつ込んだのだと思うのだが。

私は、新しい意味でのランドスケープとは、こうしたランド・デザインから考えることを言うのだと思い、そういう期待をかけてお願いしようと思ったのだが。

現実には私たち建築家と同じで、既にでき上がってしまっている造成計画に対して、この道は四季の道とし年中何かの花が咲いている道として位置付け、直行する細街路は生け垣で構成し、ランドマークとしての交差点の商業施設周辺の植栽はライトアップしてランドマーク性を高め・・・etc と付加価値を高めるレベルで終わってしまいがちなのだ。

それがランドスケープの分野ではなく都市計画の分野なら彼らにその部分受け持たせなくてはならないし、お前たち建築家がやれといわれれば、ランドデザインをやる建築家と、建築そのものとする建築家と分けてすることを考えなければいけないし、または私が信じていた様に、大きな地域や風土のデザイナーとして、ランドスケープのデザイナーがいたしましうと受けて頂いてそれなりの立派な成果を上げて頂けるなら、ぜひお願いしたい。

そうでないと、また私たちがランドデザインからしなくてはならない、古い状況に戻ってしまうから。